

# 愛珠

## 想い出ずるままに(七)

中 村 道 子



### 一 戦時下における経営

昭和十九年四月五日の入園式当日は、旧職員方をはじめ、後援会長や幹事の方々を迎え、保護者一同参列して戦時下としては思いがけなく、賑々しく挙行することができ、そして中旬には、幼児たちを幼稚園生活になじませる心やりから、中の島の剣先に当たる遊園で、雑草もかなり生えていて自然的であったから、最初の園外保育を行なった。

平素園外保育にはバスを三、四台連ねて遠く郊外に出て、自然を楽しむのに、このたびは市内で、しかも幼稚園の附近にて、大川の姿や、市街の状態を見ることも大切で必要と思ひ、かつ警戒警報の発令を案じ、その処理の行ない易い場所と信じたので、日

時と場所、そして幼稚園からの往復道路の順序などを詳細に書き、予め保護者に知らせて決行した。ときどき行っている子もあり、目新しい場所ではないが、おおぜいの友だち、先生などと一しょに行くことは、幼児にとっては非常に嬉しく、つき添いがいなくて、めそめそする子どもは一人もいなかった。従前の状態と大分違っている。

幼稚園を出発し、今橋通りから三休橋筋の人道で左に曲り、柵の木橋の停留所を越えると直ぐこの橋を渡り、向岸で階段を降りてきれいな公園道路を、流れを逆に見て二丁程歩き、難波橋の下へ出た。橋幅が相当広いから少し暗く、「わっ！トンネルや」と誰かが叫ぶと、次々に声を出して、それぞれに違う声の反響を楽しんで通り抜け、そして向こうに高く見える天守閣を見て、びっくりしたように「あっ、お城や!!」「お城や!!」といって喜ん

だ、中には飛び上がる子どももいた。と同時に幼稚園の遊園の何倍かの広い運動場には、誰もいなかったから一層広く見え、「わァー広いなァー」と喜んで走りかけたから、「あの一軒家の前まで走って行ってごらん!!」という、われ先にと皆一生懸命に走り出し、私も後について走って家の前へ行き、暫く駈足足踏をして呼吸を調整した。

この一軒家は貸ボート屋で、家の後はちょうど土佐堀川と堂島川の水が両方から流れ込んで、一つの川となり、水の動きも見えず、池のように静かである。そしてボートをたくさん浮かべている。モータボートも二隻繋いであった。この向こう岸が即ち剣先に当たるので、これを繋ぐ橋は四、五間程の幅を持ち、橋の中央七、八間の長さを少し高くして、ボートが通れるようにし、緩やかな勾配で岸へ続けてあった。

幼児たちは喜んで見慣れぬ水の景色を見ながら剣先へ着いた。難波橋の方からまわって先着した小使さんたちは、持って来たゴザを敷きはじめている。先程驚いて見た天守閣は、ここから見ると大層大きく、かつ二つの川が一つになっている所謂淀川は、河幅も広く、水面の上に見る天守閣の姿は雄大であった。「お城や、ええなァ!!」と互いに見ながらいっている。一同は敷かれたゴザの上に座って、間食程度の弁当を食べることにした。そして約束の通り柵の外へ出る子どももなく、楽しく往路を逆行して帰園し

たが、案じていた警報も出なく、無事に今日の園外保育を終えることができたので嬉しかった。

愛珠赴任当初から何かと気をつかって下さった大谷主任保母は、良縁を得て退職せられ、また二年前から欠員ができたから就任させてほしいと依頼していた先方幼稚園から、欠員ができたを迎えられて行った人もあって、職員員の異動があったが、幼児は疎開のために少なくなっていたし、学校から幼稚園への転勤希望者が、次々あって、それらの後任には差支えがなく、しかも皆はつらつとして元気に満ちていたので私は幸せであった。

それで真に気の毒に思ったが、これらの人々に頼み、かねて依頼していた木煉瓦の腐蝕個所の修理を中止して、むしろこれを取り除く方が万一の類焼を防ぎ、防火になると思つたし、かつアスファルトの道路を通って来る子どもらにとつては、園内で土に親しめることの方が、変化があつて幸福だと思つたので、皆と相談し、これを実現すべく決心して一心に頼んだ。先生たちは直ぐ賛成して下さいから、翌日の放課後から掘り起こすことに決め、私は最も腐蝕の甚しい所に印を入れて、朝会后直ぐ始めた。

砂場の周囲は大体半間ないし一間程は、工事最初の木煉瓦がそのまままだ堅牢であつたから、その所はそのままとして雲梯と平行して掘り起こした。この時私はふと「ここへ二、三人がとっさ

の場合はいれる防空壕を先に作ることにしよう」と思いつき、ぐんぐん深く掘っていた。

幼児たちは、「先生は何をしているの」と暫くじっと見ているから、「トンネルを掘っているの、でき上がったら皆にも一度通らせて上げますわ」といった。こんなことを何度もいい合って、三日程たつとでき上がった。子どもたちは喜んで何度も降り、「屋根が無い!!」「そのうちに作ってまた通らせて上げますわ。

今あまり出入りすると砂がばらばら崩れ落ちるから、通るのを止めましょうな」といったら、誰もはいらなくなった。「この辺の子たちは、素直でんな、そない躰けられているかして、一遍いうたらやめはりますわ」と、どの仕事師でもいつている。

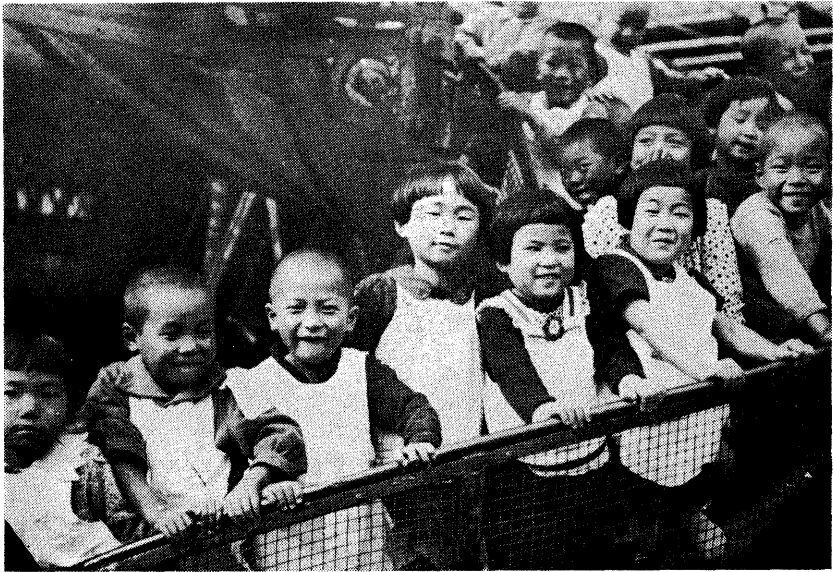
「この印からはいらんといてちょうだいというたら、印の所に立っていても側までは来はれしまへんわ、それが場末の方へ行くほど、いかんというたらよけ来はりますねん」といつていたことを思いだして、家庭でこうした躰けをつけているのだと思った。躰けは小さい子どものうちからつけて置かねば、大きくなってからではもう遅い。理屈のない時分につけて置かねばと思つた。

私がこの壕を掘っている間に、これに続けて二十坪程煉瓦が外され、ところどころこの下のコンクリートも取られていたが、これは大変な仕事であつた。砕かれたコンクリートの一片を取つてみると、コールドールで砂を固め、そのまた下に約三寸ばかり小

石が敷き詰めてあつたのである。「先生煉瓦の下のコンクリートを外すのに大分力がいらいますわ!!」「そうでつしやる!! ほんにご苦労をかけますな、壕ができたら私も仲間にはいつて取りますよ。皆ここへ参観に来た時、一面に敷いてあつた小石はどこへ行つたのかなと思いましたが、煉瓦の下に隠れていたもので、やつと行方がわかりました」といいながら、せつせと鶴嘴でコンクリートを砕いて行つた。

「先生この仕事は女にはちょっときついですな!!」「ほんとにそうですな、ほんとうにありがとう。恩に来ますで!! 何をごほびにしましょう」笑いながらいつたら、皆も笑つた。——「このコンクリートをどこへ捨てましょう?」と尋ねられたから、先年石炭殻を隣の広場に埋めて、総務部長に叱られたことを思い出したので、「あつ、それは水の出ない井戸へ捨てて貰つて埋めますわ」「そんな井戸がどこにありますの」「小使室の塵箱の横の切戸を開けて、直ぐ左の納屋の真中に丸い井戸側がありますから直ぐわかります。そこへ全部ほうつてしまつて下さい。この際危い物はなくしてしまひましょう」

「そんな井戸がありましたか」「昔良い水がどんどん出たそうですが、地下鉄の工事で水が枯れて、全く駄目になつたそうです。その頃の枯れた井戸が、御堂筋に近い東西の両側に、ちょいちょいできたそうです。その花壇の角の井戸も、今は少ししか

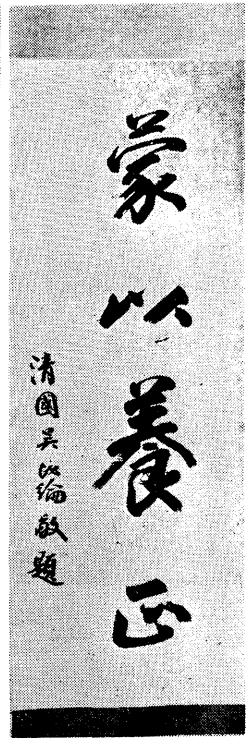
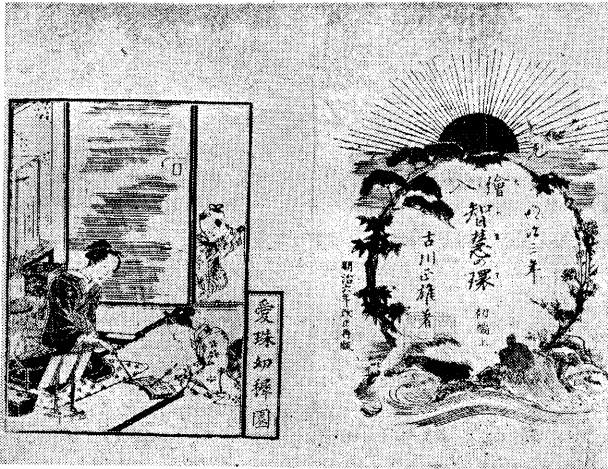
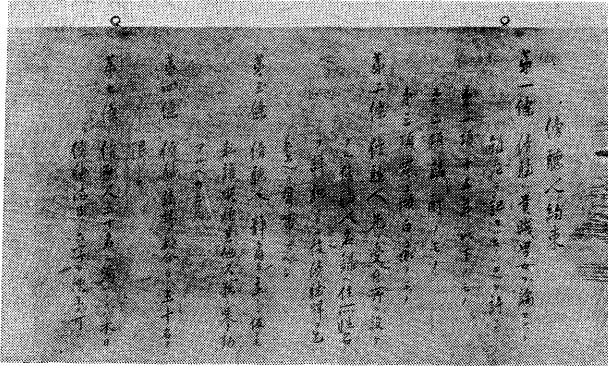


菜園を見ている幼児たち（すべり台の前方は菜園）

出ませんが断水したような時には困るから、蓋をして置いてありますよ。納屋の井戸が埋ったら、側だけ持って来て填め込もうと思っています」こんな話をしながら、こつんこつんとコンクリートをこわして行く。

「これだけ木煉瓦を外して下きったから、コンクリートが取れたらここを畠にしましょう。収穫をしたら皆にたくさん上げますで、たのしんでいてちょうだい。今日はこれでおいて、一度隣へはいつて見てちょうだいな、幼児のいない時、おとだけだったらちよっとしのげますで」笑いながら交替にはいつてみた。庫の地下室は相当広いが、幼児全部がはいって、一時間はいられないと、これまでの数回の経験で感じたから、外部に作ったのである。そして毎日ひまを見ては小使さんたちも手伝って下きったから、一週間余り後にはこの跡へ畝立をし、薩摩芋を一番多く、カボチャやトウモロコシは三株、ホオズキとトマトは二株、苗を植え、この水かけは三人ずつ交替で、怠らずせせとした。

一昨年、京浜地方に敵機B29が、最初に編隊で来襲した時、九機も撃墜し本土には損害が軽微だったそうだが、こんなことは何時までもあるはずはなく、どんなことが起こっても、備えだけは置かねばと気になっていたから、煉瓦が少しでも取除かれたことは姑息的でも心安かった。



第二次疎開させたもの  
 上・軸物・呉汝綸の書  
 左上・傍聴人約束  
 左下・古書・啓蒙智恵の環

戦時下増産協力として六月十一日以降日曜保育を全市的に始めたが、誰も当然として一同は皆よく働いた。私らは撃ちてしやまんの精神に燃えていたのである。六月十五日と翌十六日、続いて十八日にまた来襲し、そして十八日と合計四回も続いて警戒警報が発令されたし、四月下旬には訓練警報が三回も続いた後だったから、よけい気味悪く感じ、再度の疎開を計画して、残りの資料一部を十七日の解除の後、直ぐ纏めて奥井のおぼさんと二人で桜井谷へ持って行った。この日疎開させた物は、傍聴人約束と来観約束、それに保姆須知の掲示板三つの外、掛軸四個と修身及び童話の掛図、明治初年の各科に渡る小学校教授用の図等、長短揃えて持ち易くし、呉汝綸の「蒙以養正」の書と、張馨の「成人在始」の書は、折畳んで持ち易くして預けた。

呉汝綸が、明治三十五年六月清国五品卿銜京師大学堂総教習で、わが国の学制調査のため東京の途、その筋の紹介に依り随員らと来園して調査の節、保育の現状および器械・標

本・恩物・幼児の製品などを巡視した時、呉氏は、保育の方法や施設の周到な完備が、意表に出ているもので、幼児の教養は洵にこのようでなければならぬ。自分は帰国して必ずこれに倣うとの意を、通訳を通じて語られ、巡視中一幼児が自分の手技を直接手渡した時は、頭を撫で、自分にもこの位の孫がいるから、その奨励にするとして早速前記の「蒙以養正」と書かれたそうであるが、その後、通州民主師範学堂長の張謇も、「成人在始」の書を残されたから、共に国際的のものとして預けたのである。

さて三十年以上も愛珠のためによく働き続けた、本園最年長の七十歳に近い田中使丁は、老人疎開の注意を受け、家人の勧めもあって、滋賀県へ帰郷したから、家族が一人減った淋しさとあわせて、戦争がだんだん近づいて来ていることを感じた。

七月四日午前九時、また警報が発令されたから、直ぐ幼児を帰宅させ、職員並びに使丁全員は宿直をすることとして、警戒に当たったが、解除されてことなきを得た。翌日訓練として幼稚園の畳の大広間と遊戯室をあわせて、救急処置所とし、校下の医師数人が来園して訓練を始めていた時、偶ら警報が発令されたので、警防団員も多数来園して警戒に当たった。しかし午後九時には解除されたので一同は解散した。

忘れもせぬ七月十九日は、サイパン島玉砕の日で、だんだん本

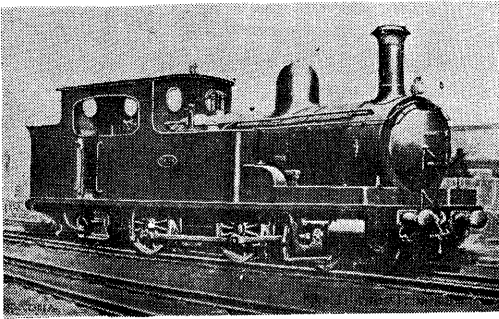
土に近づく玉砕の悲報に、思いは多々——自己の血液型を知って置くことの必要を私は感じたから、幼児をはじめ職員全部は、園医の酒井博士宅に赴き、各自の血液型を検査して貰い、早速胸の名札に記入し、誰にでもわかるようにした。

八月の暑中休暇は例の通り、希望者に、保育を続けながら、一方では資料を整理し、機会を見て三回目の疎開をしたが、幸いにこの間に警報発令のサイレンを聴くことなく無事に運んだ。また、こうした間でも唱歌・遊戯・音感・談話などの研究会や講習会もたびたび開かれ、殊に五月下旬以降から毎月二回、本園の畳広間で市役所教養課の主催で、高級吏員のみのお会と、全視学のみのお修養会が開催され、講師としてその頃朝日新聞に「超日月光」を日々記載しておられた松原致遠先生がこられ、私も親しく、話を聞くことができ、そのつと心に余裕もでき、真に幸であった。

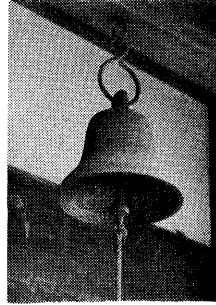
休暇中の七夕祭には、菜園のホオズキやトウモロコシ、貧弱ながら薩摩芋も供えられることができ嬉しかった。昨日二畦分だけ芋掘りをし、この日の祭がすむと全部蒸して、子どもらに与えたら非常に喜んだので、私たちは過去の辛労を忘れて真実に嬉しく思った。「二期期が来て、お友だちが、揃ったら、残っているお芋も、掘って蒸して上げましょうなア」といったら、「明日日が来てほしいなア」と、待ちかねているようであった。

愈々二期が始まって、その頃の收容幼児の大半が出席したから、二日には残りの芋を全部掘って、目方を見ると一貫二百匁あったので、全部蒸して等分に分けると、いただきまず、と口々に笑いながら食べ、小さい一切れを持って帰るという子もいた。

休暇中に老人や幼児の疎開者が増加したので、調べると大分減っていたが、これは当然のことと察した。田舎に家を持っている人は、田舎に家族を疎開させている方が安心で、市中にことある時の活動は手足まといの無い方が全力的に活動ができるから——それで私はこの状態を見て夜間警報が出た時の用意に、園内の柱全部に、高さを揃えて二寸幅の白紙を貼り、暗夜でも歩行ができるようにし



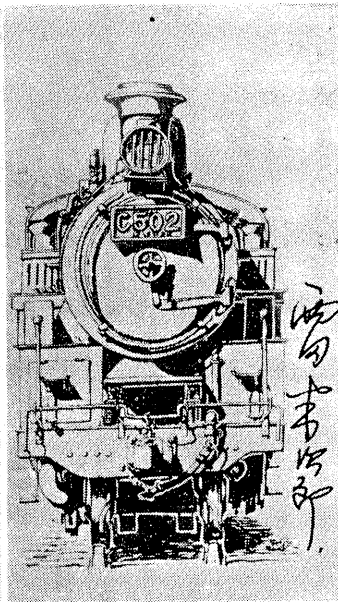
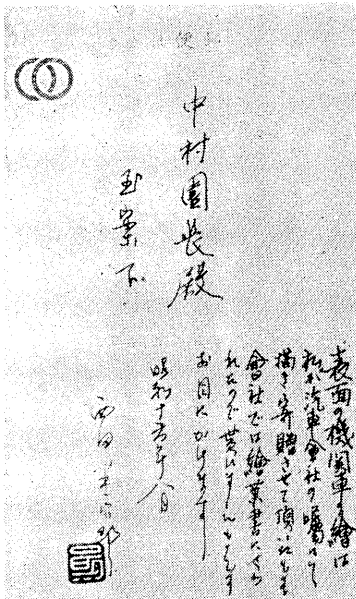
汽車製造株式会社第1回製作機関車



汽関車弁慶号についていた鐘

たのである。

去る七月十九日のサイパン島玉砕の悲報に続いて、今度の大宮



昭和初年のわが国の機関車  
(愛珠後援会幹事西田氏の画)

島、テニヤン島の悲壮な玉碎に、われわれは戦況の一層緊迫せることを感じさせられ、日々の出席幼児数も三十三、四名に減じた。ちょうどこの頃に、デング熱が流行して、誰も風邪をひかぬようにと注意したが、不幸にも愛珠後援会会計を担当して下さった、西田米次郎氏が十月十一日に倒れたので非常に残念に思った。愛珠幼稚園の幼児の集合は、西田さんが鉄道省から、謝意として受領せられた、北海道最初の機関車の弁慶号に着いていた鐘で、悲しい遺品となって、幼児集合の合図の鐘になったのである。

越えて十一月四日稲葉先生を中心とした懇談会が畳の広間で開かれた。

去る六月一日の創立記念日には、退職後絶えて来園せられなかった先生のお顔が見えて、私は非常に嬉しかった。しかしその日、共に来られた旧職員三人の方々は、はじめて逢ってなじみがなかったから、申訳ないこともあったろうが、本日来園の先生方は、昨年と今年の方全部一しょであったから、賑々しい懇談会になり、稲葉先生を中心として種々な話が交わされたのである。私は幼稚園経営に関する質問をして多分にご指導を得、益することが多かった。

先生が庭へ出て、全園をじっと眺めておられたから、私も行って眺めながら、隅に当たる保育室で保育する先生は、皆眼が悪く

なるので、惜しいがあの隅の藤一株を切って、棚を少し透かそうと思っていることを話したら、「そうね、花はきれいだが、そんならうべに植換えたらどうです。実もできまずし、葉もそんなに繁らないから、明かるくて良いですよ」といって、尚暫く眺めておられたが、これが愛珠幼稚園と永い別れになられようとは、神ならぬ自分にはわからなかった。

その後視力の衰えを保母が感じるなら、幼児にも影響があらうと信じ、かつ焼夷弾での延焼も恐れ、広瀬のおじさんに根元を切って貰ったが、藤はぐんぐん勢いを失って枯れて行ったのでかわいそうに思った。

この頃、町内にも防空壕を掘るようになって、園からも協力に出たり、戦局の時態に鑑み、五日間も休園の指令があって、これが再開すると直ぐまた、敵機の来襲が激しくなり、幼児の出席は非常に減少したので、緊迫感をひしひしと感じた。

皇太子殿下御誕辰祝賀の十二月二十三日には、畳の部屋で少ない幼児と共に祝い、遊戯や紙芝居数番をして、芋御飯を給食したら、皆大喜びであった。

閉ざされがちな気分を、一時的でも幼児と遊んで、転換したかったのである。幼児たちは、こんな時期の中でも、両親の陰にいて平和であった。